

「澁澤民間学」の生成

—— 澁澤敬三と奥三河 ——

鈴木 正崇

はじめに

日本の1910年代から1930年代初めにかけての大正デモクラシー期には、学問の地殻変動を引き起こした個性的な「在野の学」が多く生まれた。鹿野政直はこうした動きを「民間学」と呼び、国家や政府に奉仕する官学アカデミズムに異議申し立てを行い、一般の人々の学問への自発性を喚起して持続することで、既存の学問を新たに組み替えたと評価した〔鹿野1983：7〕。「民間学」の大きな特徴は、「生活」を研究主題として浮かび上がらせて対象化したことで、担い手の「民衆」、生活を営む場の「地域」、生活の基調をなす「日常性」の復権をもたらし、生活様式としての文化の再発見に繋がった〔鹿野1983：201-202〕。研究対象は普通の一般の人々である。このような「民間学」生成の背景には、急速な近代化で激変する生活への不安感や焦燥感があり、生活文化の見直しが要請されたのであった。

「民間学」には、柳田國男の民俗学、伊波普猷の沖縄学、折口信夫の古代学、南方熊楠の生物学、柳宗悦の民芸論、金田一京助のアイヌ学、喜田貞吉の被差別部落研究、今和次郎の考現学、津田左右吉の歴史学、牧口常三郎の人生地理学、小野武夫の農村学、土田杏村の哲学、権田保之助の民衆娯楽研究、高群逸枝の女性史学、山本宣治の性科学、小倉金之助の数学、田村栄太郎の一揆や博徒研究、森本六爾の考古学などとそれに連なる人々の動きが含まれるという。澁澤敬三の常民文化研究はこの範疇に入っていないが、まさしく「民間学」であり、しかも「民間学」相互を緩やかに結びつける結節点の役割を果たしていたと思われる。その象徴的な出来事が、1930年（昭和5）4月13日に澁澤邸で、奥三河のなかんぜき中在家から演者を招いて行われた花祭であった。当日の参加者の「芳名録」(参考資料参照)には、上記の人々のうち、柳田國男、伊波普猷、折口信夫、金田一京助、今和次郎、小野武夫、森本六爾の名が記されている。「民間学」は組織や制度には馴染まず、運動体として存続した。本稿では澁澤敬三が作り上げた「澁澤民間学」とでも呼ぶべき運動がどのように生成され展開していったかを、奥三河との関わり合いから検討してみることにする¹。

1 奥三河との出会い

日本常民文化研究所の前身であるアチックミュージアムの活動の初期に、澁澤敬三が奥三河と出会ったことは、その後の調査・研究のあり方を決定付ける幸運な出来事であった。活動の主体を玩具の収集から民具へと焦点を移行しただけでなく、奥三河との出会いによって、祭祀芸能・地域社会・生業形態・世界観などを総合的に把握する必要性に迫られたのである。澁澤と奥三河との関係は長期にわたったが、その背景となる人間関係や出来事も含めて、年譜として簡単にまとめてみると、以下ようになる。

●1921年（大正10）

澁澤敬三はアチックミュージアムソサエティを結成して三田綱町を拠点として活動を開始する。後世には「民具」と呼ばれるようになったいわゆる日用品を収納する「屋根裏の博物館」を敢えて英語の名称としたのは、明らかに大正モダンの影響であり、ハイカラさと高踏趣味が横溢している。当初は玩具の研究を主体としていた。澁澤は同年に横浜正金銀行に就職したが（25歳）、1922年にはロンドン支店の勤務となり、1925年8月に帰国する。この間、1923年に柳田國男とロンドンで会った。柳田とは甥の矢田部勤吉が東京高等師範学校付属中学校の同級であった関係で、早くから面識があった。澁澤は、1926年には第一銀行、東京貯蓄銀行、澁澤倉庫の各取締役に就任した。他方で、アチックを根拠地として本格的に玩具研究を始める。

●1925年（大正14）

柳田國男は雑誌『民族』を11月4日に創刊する（隔月刊。昭和4年3月、4巻3号で終刊）。出版社は人類学を専門に扱う岡書院で、創立者は岡茂雄（民族学者の岡正雄の兄）であり、1924年に創業した〔岡1974〕。柳田は1925年8月に帰国した澁澤に資金援助を依頼し、同年暮れに岡が澁澤に面談して資金を供与され、これ以後、澁澤は学問のパトロン的存在となる。岡との出会いでアチックミュージアムには多くの民族学・民俗学の学徒が集まるようになった。『民族』には考古学・歴史学・民族学・民俗学・社会学などの多彩な学者が寄稿した。編集委員は石田幹之助、田辺寿利、有賀喜左衛門、奥平武彦、岡正雄で、外部からの執筆者は浜田耕作、鳥居龍蔵、白鳥庫吉、喜田貞吉、山田孝雄、新村出、東條操、清野謙次、松村暲、ニコライ・ネフスキーなどで、実質的な担い手は折口信夫、伊波普猷、金田一京助、中山太郎、早川孝太郎であり、宇野圓空、秋葉隆、松本信廣も寄稿するなど、民俗学と民族学の出会いの場となっていた。

別の動きとして、同年に東京青山に日本青年館が完成して、全国各地の舞踊や民謡を集めて公開する「郷土舞踊と民謡の会」が活動を開始した。舞台監督は小寺融吉、企画協力は柳田國男・折口信夫・北野博美であった。NHKは出演団体をラジオで放送するなどメディアの力も加わるようになる。この催しは後の文部省主催の芸術祭での「全国郷土芸能大会」（1950～58）、「全国民俗芸能大会」（1959～）へと繋がる芸能の舞台化の始まりであった。

●1926年（大正15）

澁澤は柳田國男の紹介で早川孝太郎と初めて会う。早川から奥三河の話聞いて、花祭調査を「徹底的」にやるように指示した。「その規模、基盤の容易ならぬことに気付き」、「同君に徹底的に調査するようにお勧め」したとある。折口信夫は正月に早川孝太郎と愛知県豊根村三沢山内の花祭と長野県旦開村新野の雪祭を見学し、以後毎年のように奥三河を訪れる。

早川孝太郎は三州横山（現在の新城市横山）で1889年（明治22）に生まれた。1915年（大正4）に柳田國男と会い、民俗研究を志す。調査に卓越し、画家としての繊細な感覚を生かした見事な記述による報告は人々を魅了した。『おとら狐の話』（柳田國男と共著）（1920）、『三州横山話』（1922）、『猪・鹿・狸』（1926）など、故郷とその周辺の民俗誌を続々と刊行した。特に『三州横山話』は芥川龍之介から『遠野物語』（1910）以来の最も興味ある

伝説集と評価されて讃嘆された。早川は、1917年（大正6）から1923年（大正12）まで東京都下谷区池之端七軒町に住み、近所付き合いから、民具を収集していた宮本勢助（宮本馨太郎の父）と知り合い、1924年（大正13）から協力するようになっていた。

●1927年（昭和2）

早川孝太郎は安政3年（1856）を最後に行われなくなった大神楽の実見者を捜すために、8月に夏目一平（下津具村村長）を訪問し、図らずも彼らの民具収集活動を知って、これ以後、民具収集に協力することになる。

折口信夫は2月に静岡県水窪町西浦の田楽、3月に愛知県豊根村金越の花祭を見学する。

●1928年（昭和3）

早川孝太郎は1月5日に今泉忠義・西角井正慶と共に津具村の夏目一平宅を訪ね、窪田五郎（本郷小学校校長。田口生まれ）と会う。6日には豊根村上黒川で一緒に花祭を見学した。1月8日には滞在していた下黒川の森屋旅館で、窪田五郎の紹介で原田清（本郷町長。本郷生まれ）と出会い、これ以後親交を深め、民具収集が本格化する。窪田五郎は夏目一平と共に収集活動をしていた。折口信夫は1月9日に来村して、10日に講話を行なった。折口信夫は豊根村金越と上黒川の花祭、水窪町西浦の田楽を再度見学する。なお、同年10月21日には國學院大學で郷土研究会主催により三沢山内の花祭の実演が開催された。

同年1月に「郷土舞踊と民謡の会」（1925年活動開始）と深い関係を持つ『民俗藝術』が発刊され、柳田國男の巻頭言（署名無）が掲載されて、民俗芸能を近代とは異なる「古風」で「始原的」な身体技法とみる視点を示し〔橋本2006：116-117〕、その後の民俗芸能研究のあり方を呪縛するような方向性を提示した。柳田自身は芸能研究には深入りせず、この分野は民俗芸能に「古代」を透視する折口信夫、その弟子筋で舞踊学を取り込んで「美」を強調する小寺融吉、「中世」と「美」を融合する本田安次の研究に委ねられ、戦後は池田弥三郎や三隅治雄などの「芸能史」へと受け継がれることになった。なお、同年に各地の民俗の報告を主とする『旅と伝説』が創刊されて、一般の人々の民俗への関心が高まった。

●1929年（昭和4）

澁澤敬三は正月に初めて奥三河を訪問し、原田清と窪田五郎の案内で上黒川の花祭を見学する。同行者は高橋文太郎と藤木喜久磨で、早川孝太郎や夏目一平も加わった。これ以後、澁澤は「花狂い」となり、1935年（昭和10）までの7年間、正月を奥三河で過ごすことになった（ただし、病氣療養のために伊豆内浦に滞在していた1932年は除く）。この頃から、研究の焦点を玩具から民具に移した。

同年、村落社会学会が創立され、農政学、地理学、民俗学、社会学、教育学など多様な分野で「郷土」研究に学問的な関心が高まった。文部省は1930年からは昭和恐慌によって激しさを増した農村問題に対して全国的な郷土教育運動を開始し、この動きと連動する。

●1930年（昭和5）

澁澤敬三は正月は奥三河の中在家と足込で花祭を見学した。同行は折口信夫、今和次郎、早川孝太郎、宮本勢助、高橋文太郎などであった。同年3月に刊行された『民俗藝術』第3巻第3号は「花祭り特集」を組み、折口信夫は「山の霜月舞—花祭りの解説」を寄稿している。早川孝太郎が7年をかけて作成した『花祭』（前篇・後篇）は4月に岡書院から

出版された〔早川1930〕。4月13日には、『花祭』の出版と澁澤家自宅の新築落成を記念して、愛知県本郷町（現在は東栄町）中在家の人々を三田綱町の自宅に招いて、「一力花」の奉納が行なわれた（『民俗学』昭和5年5月号に記事掲載）。東京では初めての花祭の公演で、民俗学者は古代風の言い方で「新室^{にいむろ}ほがひ」と呼んだ。澁澤は100人以上の人々を招待した。参加者の「芳名録」（文末の参考資料参照）によれば、著名な人物として、柳田國男、伊波普猷、泉鏡花、石黒忠篤、新村出、宇野圓空、白鳥庫吉、石田幹之助、宮尾しげを、有賀喜左衛門、松本信廣、松平齊光、横山重、木内信胤、前田青邨、小林古徑、金田一京助、幸田成友、穂積重遠、東畑精一、小野武夫、上原専祿、野上豊一郎、石坂泰三などがある。歴史学・民俗学・民族学・農政学・言語学・宗教学・地理学・国文学・法学・経済学・社会学・芸能研究・日本画家・小説家・アイヌ研究などの分野で当時の第一線で活躍中の人々を集めており、財界関係者も含まれるなど、澁澤の幅広い人脈を知ることが出来る。14日にはもう一度、花祭を再現してもらって16ミリフィルムに収めた。まさに、奥三河の花祭にとっては大きな転換点になった。

折口信夫は、この年には多くの実演や見学に関わった。4月14・15日に國學院大學郷土研究会主催の足込花祭、4月22日に民俗藝術の会・國學院大學郷土研究会共催の西浦の田楽（解説もする）、5月3日は郷土研究会主催で行われた新野の雪祭の実演に関わる。6月には『古代研究』民俗学篇第二を大岡山書店より刊行する。折口信夫は明治神宮鎮座十周年祭の催事として日本青年館で行なわれた比山番楽を見学した。同年12月には奈良で春日若宮おん祭を見るなど、中世芸能への関心が高まった1年間であった。

なお民族学と民俗学の交流に寄与した雑誌『民族』は前年の1929年に終刊となっており、澁澤も独自の道を歩み始めた。

●1931年（昭和6）

澁澤は正月は奥三河の中在家で花祭を見学する。父の栄一の死去により子爵となる。東京貯蓄銀行取締役会長に就任する（35歳）。

折口は正月11日に三河本郷に泊り、12日に山内の花祭、14日に新野の雪祭を見学する。

●1932年（昭和7）

澁澤は正月は病氣療養のために伊豆内浦に滞在する。一方、折口は正月6日に大入の花祭を北野博美、西角井正慶、波多郁太郎、藤井春洋ら13名と見学する。大入は花祭発祥の地の一つとされる場所である。

●1933年（昭和8）

澁澤は正月は奥三河の下津具で花祭を見学する。この折に、原田清に招かれて、信州の本山を訪れる。本山は原田の経営する山の生活拠点で事務所があり、山林経営の実態に触れることになる（『本山雑記』：148-152）。奥三河の友人たちである原田・夏目・窪田などとの交流が民具研究の基礎にある。

1932年の3月に創刊された『郷土風景』（編集人、久米龍川）が、1933年11月に『郷土芸術』と改称されて、民俗芸能の記事の掲載が始まった。

●1934年（昭和9）

澁澤は正月は奥三河の中在家で花祭を見学する。16ミリフィルムで湯囃子を撮影することを目的としていた。前回の撮影では取り残していたからである。同行者は早川孝太郎、

高橋文太郎、宮本馨太郎であった（『本山雑記』：194-197）。

折口信夫は、昭和9年東北旅行の折に本田安次の案内で岩手県の早池峰山麓の大償神楽（昭和4年までは門付け）を見て別当宅に泊まった。引き続き岳神楽を見学した。

日本民族学会（2004年に日本文化人類学会に改称）が創立される。

●1935年（昭和10）

澁澤は正月は奥三河の御園と中在家で花祭を見学する。同行者はドイツの人類学者シュミット、早川孝太郎、宇野圓空、柴田實、新たにアチックにはいった五十澤二郎、市川信次、小川徹であった。中在家訪問時の「寄せ書き」が掛軸に表装され「遊於花」として原田畊作氏宅に残っている。署名はシュミット、澁澤敬三、窪田五郎、市川信次、原正雄、宇野圓空、原三郎、五十澤二郎、夏目一平、柴田實、竹下角資、小川徹、夏目義昌、榎本文治、早川孝太郎である。訪問者は民俗学者だけでなかった。後に宇野は宗教民族学、柴田は文化史学、小川は沖縄の社会史や地理学を専門とすることになる。

アチックマンズリー第1号が同年の7月30日に発刊される（1939年5月の44号まで）。

柳田國男の還暦を機に開催された民俗学講習会に参集した、全国の研究者の要望によって「民間伝承の会」（1949年に日本民俗学会となる）が結成された。

●1948年（昭和23）

澁澤は奥三河の本郷を訪問して、原田清の墓参をする。

●1949年（昭和24）

澁澤は正月は奥三河の中在家の花祭を再訪した。これが最後の奥三河行きとなる。

奥三河での収集資料は民具類や地方文書に止まらず、花祭関係では、面、舞衣装、祭具が集められ、資料として16ミリフィルム、写真、報告書が残された。奥三河の調査は、アチックの活動の原点となり、幅広く活動を展開していく転換点となった。それは、奥三河という地域、山村という暮らし、「花祭」という祭祀芸能、民具と祭具と生業、地元の仲間と研究者との交流など、多岐にわたる研究課題と多様な人々との出会いの累積の上に成り立っていたのである。

2 花祭の調査がもたらしたもの

花祭の調査によって、アチックの活動内容が飛躍的に拡大し、深まりも見せることになった。その中から幾つかの大きな動きを指摘すれば、以下の4点ほどにまとめられよう。

①記憶の固定化と複製と再現への展開

本格的な映像記録の作成によって、記憶を固定化することで、複製と再現を可能にする資料の蓄積に展開した。伝承のテキスト化という文字による記述だけでなく、写真・映像・録音によって記録することで、収集した資料の質を転換し、量としても飛躍的に増大させた。これによって、記憶と伝承に基づく技法の伝達について新しい方法論を模索する契機が生み出された。複製芸術の時代（ベンヤミン、W. Benjamin）の到来に対応する調査方法論を提示したのである。結果的には調査する側が、地元側に記録を還元する動きに展開して、民俗の意識化という現象を生み出し、資源として活用する方向へと歩み出した。

②口頭伝承から身体伝承へ

民俗学が主として基盤としていた口頭伝承だけでなく、身体伝承への関心を喚起し、戦後になって「民俗芸能」と呼ばれるようになる研究ジャンルの切り取りを可能にして、新たな方法論を要請した。これは従来の柳田國男の民俗学には欠けていた、所作や動作など動くものを捉える視点の導入であり、折口、早川、澁澤といった新たな人脈によって生み出された。その成果として出版された早川孝太郎の『花祭』は、文字・説明図・絵画を生かした民俗誌で、分析的な書き方によって、単なる報告ではない立体的な叙述形式を創造し、非文字文化の記録と研究の先駆的業績となった。特に文中の「地狂言雑記」は地元の民俗を生き生きと描き出し、文学に近づいている。本書の刊行は、文化の保護や保全の基礎資料を提供する意味合いも持ち、文化財の制度化や文化庁による保護育成の政策の基礎資料となった。これは無形民俗文化財（1975）の指定や世界無形文化遺産（2009）への登録などの動きに繋がる。現在の視点で評価すれば、「文化の客体化」や「文化の資源化」の出発点となり、身体技法を焦点化する「非文字性」を主題化する方向へと展開したと言える。澁澤邸での公演の後、折口信夫が関わって、足込の花祭、西浦の田楽、新野の雪祭の実演が國學院大學で行なわれた。この後は、次第に舞台公演という形式での民俗の切り取りが行なわれるようになり、民俗芸能大会などを通じて、「見る」→「見られる」→「見せる」という関係性で成り立つ芸能の意識化、文化の客体化の動きが出現し、結果的には地元の人々に伝承を変化させる契機を作り出したのである。

③「文脈化」と「複合化」によってモノの持つ意味を探求

1930年の澁澤邸の公演での16ミリフィルムによる記録化は、面、舞衣装、道具などのモノの収集に止まらず、写真と映像を組み合わせる文脈化し、その上で総合的に全体の機能や意味を探る可能性を提示した。奥三河という地域や多くの地元の知識人との出会いは、社会組織や経済活動を支える生業形態への関心も呼び起こした。その結果、アチックの活動は、単にモノを個別に収集するだけではなく、異なる質の資料を文脈化し複合的に組み合わせ、多様なアプローチを適用する手法を開拓することに迫られた。奥三河の経験を基礎にして、アチックは資料収集を全国に展開して、調査活動を活発化させ出版も順調に進むなど1935年から1939年頃の黄金時代を作り出した。その原点に早川孝太郎の『花祭』があり、地域のモノグラフが、普遍性を持ち、一般化に結びつくことを広く認識させた。

④「知」のあり方の変容による新たな学問の構築—収集から「民間学」へ—

研究者側に民俗学・人類学・歴史学の共同作業の場が生まれて視野を拡大しただけでなく、地元の知識人との外部の訪問者の交流による創造の場が創りあげられた。学際的に特定の地域を研究するスタイルはその後の九学会連合による調査（対馬、佐渡、奄美など）へと継続される。こうして生み出された地理学・歴史学・音楽学・民俗学・文化人類学などの交流の場のネットワーク再編による知の再構築の中核には、モノへの関心があったが、好事家の収集に止まらず、それを体系化した民具学へと徐々に移行することになる。玩具から民具の収集へ、地域社会・祭祀芸能・生業体系の研究へと進む。しかし、常にモノへと回帰する傾向性を持っていたのは澁澤敬三の物質文化への拘りがあったからであろう。地元と外来の絶えざる往復運動による高次の地平への展開は、諸分野の再編と統合によって、単なる民具研究ではなく、野の学問としての独自の「澁澤民間学」の成立へと歩み出したといえる。地元と外来の合作であり、相互交流を基底に置いて生み出された知の新しい

いカタチであった。そこには明治の「経世済民」の精神が脈打っている。澁澤が目指したのは良質な資料を残すことで後世に資するという素材提供に徹することであり、採算を度外視した緻密なモノグラフの作成の刊行により、現在では貴重となった記録の数々が提供された。その中の記述には単なる記録を超えた人間の生き方の探求へと向うものもあった。有賀喜左衛門の石神のモノグラフである『南部二戸郡石神村に於ける大家族制度と名子制度』（1939）の序文や、宮本常一の『家郷の訓』（1943）や『忘れられた日本人』（1960）などはその好例である。ただし、記述のあり方を問うことは課題として残されている。

3 1930年以後の人々の動向

花祭が澁澤邸で演じられたことが多くの人々に影響を与えた。早川孝太郎の『花祭』もしばらく人々の話題をさらった。モノグラフの重要性と身体技法という新たな分野への展開が人々の関心を引いたのである。奥三河調査が行なわれていた1920年代と30年代は、民俗学と民族学が接近し、相互の協力と反発の動きの中で、多くの分野の人々がこの領域に参入し、豊かな学問を形成する揺籃期にあっていた。そのような中で、澁澤邸に集まった人々は1930年代以降にどのような活動を展開したのだろうか。民俗学に関係の深い人々を数人選んで概観する。なお、折口信夫については小川直之の別稿を参照されたい。

①柳田國男（1873-1962）—民俗学の体系化

1930年代は民俗学確立の時代であった。柳田は1930年11月20日に朝日新聞社の論説委員を辞任し、『明治大正史 世相篇』に着手する（1931年刊行）。1933年9月から12月にかけて自宅で行なった12回の講義の口述筆記を元に、民俗学の概論『民間伝承論』を1934年に刊行し、学問の体系化の構想を具体化して、大きな反響を呼んだ（当時60歳）。早川孝太郎の『花祭』（1935）の刊行にあたっては、まえがきを寄せている。1935年7月には日本民俗学講習会を開催し、柳田とその弟子達による講義を通じて、全国から集った人々に民俗学という学問の骨格を提示した。終了後に「民間伝承の会」が組織され、後に日本民俗学会へと展開することになる。第二の概論書である『郷土生活の研究法』を1935年8月に刊行した。民俗学と民族学の協力体制は崩れて、民俗学の自立化が始まった。

②宇野圓空（1885-1949）—宗教民族学の開拓

1923年（大正12）にフランスで民族学を学んで帰国、これ以後宗教民族学を展開し、1926年（昭和2）に東京帝國大学助教授、1941年に同大東洋文化研究所教授、1943年に所長となる。澁澤と関係の深い岡書院から『宗教民族学』（1929）を刊行した。1942年に『マライシヤに於ける稲米儀礼』（東洋文庫、1941。再刊、日光書店、1944）で学士院恩賜賞を受賞した。他の主要著作に『宗教学』（岩波書店、1931）、『修験道』（東方書院、1934）、『宗教学通論』（八洲書房、1943）がある。宇野は、姉崎正治が確立した宗教学を、文献研究からフィールドワークへと展開することで、海外との比較や、民族学との接合という、広い地平に置き直す役割を担ったと言える。ただし戦時中は、東京帝國大学南方研究会会長となり、『大東亜の民族と文化』（文部省教学部、1942）を刊行し、ソロモン群島などの民族誌の翻訳と刊行にたずさわるなど、植民地政策に協力した。

③有賀喜左衛門（1897-1979）—家制度の社会学的考察

早川との交流を通じて聞かされてきた花祭を実際に見ることで「花狂い」の一人となっ

た。『花祭』の刊行によってモノグラフ作成の重要性にも気づいた。しかし、芸能よりは社会構造に関心を向け、1935年（昭和10）に岩手県二戸郡荒沢村石神の斎藤家を訪問し、日本の家制度の研究に本格的に着手して、その成果は『南部二戸郡石神村に於ける大家族制度と名子制度』（1939）というモノグラフとして、アチックミュージアムから刊行された。これを理論化した著作が『日本家族制度と小作制度』（1943）である。ただし、調査のきっかけは1934年の澁澤敬三による石神訪問に遡る。なお、澁澤と有賀は仙台の第二高等学校での同級生であった。『早川孝太郎全集』第1巻（花祭）の刊行にあたって「『花祭』に関する一つの解説」を執筆し（1971年7月31日稿）、芸能を通してその基盤にある社会についての考察を行い、イエ社会研究の立場から花祭を読み解く視点を示した。諏訪の大地主の家に生まれた有賀にとって、南信濃や奥三河は身近な土地であった。1930年代の「郷土研究」の高まりと信濃教育会の郷土教育の動きを背景に、柳田國男の民俗学の影響のもとで、マリノフスキーの人類学とフランス社会学を融合して独自の農村社会学を作り上げた。

④宮尾しげを（1902-1982）—大衆芸能の探求

1922年に東京毎夕新聞社に入社して、『漫画太郎』『団子串助漫遊記』などの漫画を掲載した。当初は漫画家であったが、次第に民俗学、江戸文化の研究に移行し、各地の祭や芸能を訪ねて紹介し、『郷土芸術』に関わるなど、啓蒙的活動を行なった。民俗芸能関係の著書として、『文楽人形圖譜』（時代社、1942）、『日本の郷土藝能と行事：アルバム』（編著。未來社、1955）、『諸国祭礼行脚』（修道社出版、1966）、『芸能民俗学』（伝統と現代社、1975）、『諸国の祭と芸能』（三省堂、1980）、『日本祭礼行事事典』（編著。修道社、1968）などがある。民俗一般から大衆芸能に至る幅広い研究を行った。折口などの芸能史研究とは異なり、変化して止まない大衆芸能に関心を寄せ、サブカルチャーに注目した先駆者であった。

⑤宮本常一（1907-1981）—世間師として生きる

奥三河の調査を生業や社会の観点から進め、「名倉談義」「女の世間」など日常生活での会話を生かした聞書は、後に『忘れられた日本人』（1960）に収録されて、民俗学に大きな影響を与えることになった。生業形態の変化や社会組織、村落構造などに興味を持っており、芸能への関心は薄い。1930年の澁澤邸での花祭には参加していない。しかし、澁澤家に居候として暮らすようになり、資金援助を得て全国各地をくまなく歩き、「民俗知」を掘り起こすことで、農山漁村の地域振興に力を尽くした。聞書きを通して、自らが「世間師」となって地元の声を伝える運動を展開した。単なる民俗の掘り起こしを行うのではなく、日常性の重要性に注目した生活改良運動の実践者であったという評価も出来るであろう。

⑥^{しんむらいずる}新村出（1876-1967）—言語学の日常化

東京帝国大学の上田万年の下で日本語の言語学的研究に着手し、1909年に新設の京都帝国大学の言語学講座の初代教授となり、比較言語学、南蛮・キリシタン史料、語源・語誌研究に膨大な業績を残した。柳田國男とは微妙な関係であったが、相互に言葉の収集の重視や意味・語源の探求という点では一致していた。京大民俗学会の発会（1927年。西田直二郎）、京大国語方言学会の発会（1931年。新村出）、柳田國男の京都大学での集中講義（1934

年、1937年)など京都との交流の時期であった。岡書院の岡茂雄が新村と柳田の仲を取り持つということもあった。ただし、澁澤との関わりについては、今後の課題とする。

4 松平齊光の活躍

花祭の東京公演で最も深い影響を受けたのが、松平齊光^{なりみつ}(1897-1979)であった。松平はヨーロッパの政治思想史の研究者であるが、同時に日本の政治思想に取り組み『神皇正統記』の記述に衝撃を受けて、論理性よりも「古来の心情を伝える祭」にこそ固有の思想を求めべきだと考えて、祭の研究を志した。1930年に澁澤敬三が自宅に招いた奥三河の花祭を見学して刺激を受け、早川孝太郎の『花祭』を何度となく通読し、日本の祭全般に対して、早川流の実証的研究を行なうことを試みた。その後、『花祭』を携えてフランスのソルボンヌ大学に留学し(1931～1939)、『古代中国の祭りと歌謡』(1922)など中国古代研究を行っていたグラネ教授のもとで祭に表出する政治意識を社会学的に研究した博士論文を執筆した。帰国後、全国の祭を見て回ることを決意し、祭礼研究会を組織して、各地の祭を報告する雑誌『おまつり』を刊行した(1941～1944)。祭に関する考察として『祭』(1943)と続編の『祭—本質と諸相—』(1946)を刊行し、本格的な祭研究の先駆的業績となった[松平1943, 1946]。戦時下での国威発揚のための伝統の掘り起こしという側面があるものの、当時の臨場感溢れる調査記録とそれに基づく考察を含んでおり貴重な成果である。

『祭』は「祭礼に現われたる村落の二元性」を冒頭に置き、祭礼を中心に日本の村落生活が独特の二元的構成を持つことを論述する。デュルケムの社会学的方法による日本の祭の研究で、「一つの祭礼を中心に村落が如何に組み立てられているか、又その社会的、経済的生活が如何に組織されているかを中心として観察する」ことを目的とした。その後で「祭のさまざま」として全国二〇ヶ所の祭りの調査を提示し、浅草の三社祭、赤塚の田遊、伊豆の鹿島踊、豊橋の鬼祭、三河の花祭、相馬の野馬追、大日堂の祭堂、羽黒山の花祭、黒川の王祇祭などについて考察を加えた。

『祭—本質と諸相—』では日本の祭の本質とは何かという主題を設定し、1943年と44年の調査に基づいて各地の祭の諸相を総合的に観察して祭の基本的概念を抽出し、古代人の宇宙観を復元しようと試みた。祭を比較し分類して意味を探り出すことに主眼を置くが、総合観察を重視し、「祭儀の持つ名称や動作、そこで使う祭具服装、その形態、構造から用途機能に至るまでを入念に調べあげ、各行事に期待されると思われる目的や御利益を拾い集める」ことを主眼とし、この作業を多くの祭に拡大すれば、「日本の祭一般を支えてきた心理的基盤を読み取ることになり、それを進めていけば、やがては、神、靈魂、生死、祖先、氏族、民族、善悪、美醜、法律、国家、政治等に関する日本固有の考え方を帰納し出すことができる」と考えた。究極的には「古代心理」を復元し、現代の科学的常識に大胆な変更を迫る試みであるという。デュルケムやモースの社会学の影響を受けつつも、実態調査に基づく帰納主義の立場から独自の見解が提示されている。

全体の構成は、Ⅰ、祭の本質、Ⅱ、祭のさまざま、の二部からなり、前者は、神、靈魂、祭の本質の三章、後者は鞍馬の竹切り、綱引神事(横手のかまくらなど十一項)、羽黒山のおとしや、出雲の正月(恵曇神社御頭祭など五項)、諏訪の祭、那智の扇祭、志摩の浦

風（安乗の座祭など七項）の七章からなる。後者のⅡは各地の祭の実態に即した考察である。

I部の内容は以下の通りである。第1章「神」は、1、神の特性：神の超感覚性、神の示現、人や物に憑く性質、託宣、依代、変身飛翔性、可分性、接触物に拡充する性質、超自然力、神力の相対性。2、神の持つ人間性：物質欲、芸術愛好、契約尊重、恐怖心、判断の結果主義、子孫眷属の愛護、嫌悪するもの、罪穢れ、からなる。

第2章「靈魂」は、1、靈魂と神との関係：靈魂とは何か、靈肉の相関関係、靈魂の単位、靈魂と神の関係、靈魂の発育、迷える魂。2、氏神と祖靈：迷わざる魂、死靈の成長、死靈と祖靈、単純な氏族結合の氏神、氏族連盟の氏神、神の特遇を受ける氏族の氏神、氏子と特殊の関係を持たぬ氏神、産土神、氏神の本質、神と靈魂の関係、である。

第3章「祭の本質」は、1、和魂と荒魂：善神と悪神、一神の両面としての善悪、二元的な世界観、穢れと祓い、穢れの予防。2、靈界の法則：靈界法則の必然性、神々操縦の原理、祭の構造、祭の公的性質、祭の争奪、祭の主体、である。

後半のⅡ部では、鞍馬の竹切り、綱引神事、羽黒山のおとしや、出雲の正月、諏訪の祭、那智の扇祭、志摩の浦風の7章から構成され、各地の祭の考察が加えられている。

祭研究としての本書の意義は、構成要素とその特徴の考察に止まらず、祭を総体として研究していることである。特に、綱引や競技、或いは座や村落の構成に現われる、男と女、左と右、東と西などの二元構成に注目して、対立しつつも一つになることに独自性を見る。神は善神と悪神、和魂と荒魂という二つの要素を総合するのであり、氏神も自らを二分して働かせ、和合させつつ躍動させることで、繁栄や豊饒を祈願するのだという。二元的要素の対立は、対等ではなく、優劣があるなど不均等性を持つという。和魂と荒魂の二元構成は更に二分され、各々が更に二分されて無数の継列を形成して、和魂と荒魂の様々な組み合わせを生成するのであり、宇宙は人間にとって判別し難い混淆となる。祭の二元的思考は、政治を始めとする様々な社会生活の中にも現われるという。中核にある二元的な世界観と闘争の実践は相互に原動力となって、神話や儀礼に現われ、演劇的に示されることで、宇宙のあり方を説明する有力な原理となると考えた。

松平は日本の祭研究の先駆者であり、『祭』（1943）と『祭一本質と諸相一』（1946）は、柳田國男の『日本の祭』（1943）と並ぶ祭の体系的な理解に関する優れた成果である。柳田の祭研究が歴史の復元に関わり、その変化を説くのに対して、松平は本質にこだわり、時空間を越えた宇宙の原理を探求するというスケールの大きさを持ち、構造主義を先取りする思考を含んでいた。しかし、祭を通じて、日本や日本人の特性を本質主義によって描き出すことは、見方を固定化して研究者の論理を絶対視する傾向を生む。動的な変容過程に着目し、歴史的变化を踏まえた上で、異質のものを取り込み変形していく民衆の想像力の多次元的な理解が求められる。

5 「澁澤民間学」の生成

澁澤邸で花祭が行われた1930年（昭和5）の前後は、大きな社会変動の時期であった。「澁澤民間学」の生成を考えるにあたっては、当時の社会経済の状況に関しての理解を深める必要がある。1930年はアメリカで起った大恐慌の翌年である。大恐慌は、1929年10

月24日、ニューヨークのウォール街での株式市場の大暴落に端を発し、世界経済全体を巻き込んで、多くの銀行の倒産を引き起こし、失業の拡大や金融収縮が生じ、1933年まで続いた。日本にもその影響が及び昭和恐慌となつて、経済不況が深刻化し、政府は1930年に金解禁を行つて、金本位制を構築しようと試みたが、時既に遅く、逆に1931年には金輸出禁止を行つて、金本位制は崩壊した。澁澤は経済界の中核にいて、金融システムの脆弱さや人間の欲望の限りない闇に気付いていたに違いない。資本主義や貨幣経済の底知れぬ暴力性が渦巻く大都会に生活していた澁澤にとって、日本の農山漁村は別世界・異文化に感じられたであろう。当時の奥三河は貨幣経済が浸透していたが、生活の基本では自給自足体制が維持されて、山林資源も豊富で、量的にはともかく、質的には充実した「豊かな社会」であった。むしろ、山村では大恐慌の影響は軽微で、森林は富の源泉であり、生業を維持する人間同士を繋ぐ組織は堅固に維持され、相互の信頼感は強いものがあり、独自の自然観や世界観が人々の暮らしを支えていた。勿論、その内部には大きな社会的格差が存在し、経済的矛盾を抱え、排除や差別もあり、予定調和に満ちた社会でなかったことは言うまでもない。その渦中で生まれた早川の『花祭』は、民衆意識を昇華した独自の文体による民俗誌として自省的に日本を捉え返す契機となり、花祭の東京公演は、書物の知識ではなく体験知によって死を乗り越え再生を齎す祭のエネルギーを感じ取る転換点になった。ただし、澁澤は早川の記述に社会経済史の裏付けがないことを指摘し（「アチックの成長」1933）、早川は1933年に九州大学農学部農業経済研究所助手として国内留学して、課題に答えようとした〔須藤 1993：28〕。

澁澤は日本の農山漁村を実際に尋ね歩き、現地の研究者や好事家や篤農家などと密接に交流をもちつつも、よそ者に徹して、観察眼を駆使して地方の「民俗知」を累積的に蓄積していくことで、日本の「政治経済」を総体として広く見つめ直して、「社会」を再構築する構想を模索していたのではないか。近代化に伴い、進んだ都市、遅れた農山漁村という進化図式が定着しつつあった時代にあつて、相互を同等の位置に乗せて相対化する。そのためには、都市と農山漁村を繋ぐ「世間師」そして「媒介者」、あるいはコーディネーターとして相互を照射しながら研究を展開し、本や写真や映像という情報媒体で都市にメッセージを送り続ける必要があつた。一つの眼で農山漁村を、もう一つの眼で都市を見るという複眼的思考こそが澁澤の真骨頂であつた。ポランニーの経済人類学の用語を借りれば〔ポランニー 1998〕、「実体的経済」（substantial economy。人間が生活のために社会や自然環境との間に築く交換や代謝）と「形式的経済」（formal economy。限られた手段で最大限の利益を追求する人間行動）の相互を往復しながら、人間にとって真の豊かさとは何かを求めていたとでもいえようか。

柳田國男が農政学から出発して民俗学へ向つたのと同様に、それはまさしく「経世済民」の学の実践であつた。しかし、農村出身の柳田が、生活体験から生まれた「なぜ農民は貧なるや」という問いを根源的な出発点として、民間信仰を中核にして民衆の書かれざる歴史の中に解決の智慧を見出そうとしていたのに対し、都市出身の澁澤は知的エリートとしてよそ者の視点から農山漁村を、「知と物と人の資源の宝庫」として把握し、モノと技能と心の探求を通して、貨幣で測れない「真の豊かさ」の可能性を発見する場としてみている。その意味で、「澁澤民間学」は経済学への強力なアンチ・テーゼであるに止まらず、

近代とは何かを問い直す批判的実践でもあった。経済一辺倒の時代から、文化と経済の調和へ、あるいは文化を核にした経済発展が模索されている現代にあって、様々の「民間学」の結節点にあった「澁澤民間学」の持つ意義を問い直す必要がある。

参考文献

- 岡 茂雄1974『本屋風情』平凡社（中公文庫、1983年再刊）。
- 神奈川大学日本常民文化研究所編2007『本山雑記』日本評論社。
- 鹿野政直1983『近代日本の民間学』岩波書店（岩波新書）。
- 後藤総一郎監修・柳田國男研究会編1988『柳田國男伝』三一書房。
- 佐野眞一1998『渋沢家三代』文藝春秋（文春新書）。
- 澁澤敬三1961『犬歩当棒録』（祭魚洞雑録第三）角川書店。
- 『澁澤敬三』（上・下）澁澤敬三伝記編纂刊行会、1979・1981。
- 『柏葉拾遺』柏窓会、1956。
- 須藤 功1993「日記手紙にみる早川孝太郎 六『花祭』と花祭」『未来』361号、未来社。
- 橋本裕之2006『民俗芸能研究という神話』森話社。
- 早川孝太郎1930『花祭』（前篇・後篇）岡書院（再刊。『早川孝太郎全集』第1巻・第2巻、未来社、1971、1972）。
- 松平齊光1943『祭』日光書院（再刊。平凡社、1998）。
- 松平齊光1946『祭一本質と諸相一』日光書院（再刊。朝日新聞社、1977）。
- 『屋根裏の博物館—実業家澁澤敬三が育てた民の学問—』横浜市歴史博物館、2002。
- ポランニー、K. 1998『人間の経済』岩波書店（玉野井芳郎他訳）。Polanyi, Karl, *The Livelihood of Man* New York : Academic Press, 1977.

* 参考資料—澁澤邸花祭・参加者一覧

「昭和五年四月十三日 三田綱町邸花祭 来会者芳名録」

（目録番号：河岡1-29-26 神奈川大学日本常民文化研究所蔵）

本資料は、河岡武春所蔵で「祭魚洞書屋」の原稿用紙に筆写された原本の写しであり、五十音順に整理されている。記載内容が正確か否かは、原本にあたって確定する必要がある、原本は探索中である。ふりがな、疑問符、空白は写しのままで掲載した。

青木芳、青木寛、明石照男、赤堀英三、朝比奈正美、有賀喜左衛門、飯塚友一郎、石井健吾、池上隆祐、池上謙三、池上広正、石坂泰三、石田幹之助、石本己四雄、石本みさほ、石黒忠篤、石黒孝次郎、石黒重子、石黒元子、石黒光子、泉鏡太郎、泉二郎、井田善之助、市河三喜、伊藤禄之助、伊藤嘉章、伊藤良、井上徳二郎、井上薫、伊波普猷、上原専禄、宇野圓空、大久保泰、岡茂雄、岡田純夫、岡村千秋、岡村綱一郎、岡村肇、岡村千馬太、岡本信三、荻野正孝、岡村布作子、尾上登太郎、小倉俊、小畑久五郎、大沢佳郎、大田代仁子、小野武夫、尾高豊作、尾高鮮之助、大藤時彦^{おおとう}、桂泰三、片岡龍夫、加藤泰邦、金城朝永、川口寛三、木内信胤、菊地健三、菊地武、姜鋌 沢、姜今福、木舟庄七、木村修三、木村 、金田一京助、熊谷辰次郎、窪田栄、小畔震三、小池厚之助、小泉鉄、幸田成友、小寺融吉、小寺敬孝、小手川重次郎、小林古径、駒形栄助、齊藤為五郎、酒井仁、坂井千代？、佐々木修二郎、佐藤富治、佐治祐志^{さんべい}、三瓶寛、志立鉄次郎、柴三九男、澁澤篤二、澁澤元治、澁澤亨三、白鳥庫吉^{しめずい}、守随一、白石喜太郎、新^{しん}村出、鈴木重治、鈴木八郎、杉田きみ、杉田富、杉本行雄、関真三郎、曾志崎誠二、高田正、高橋文太郎、武井武雄、竹友常雄、田中市郎衛門、田村剛、千葉明、図師義彦、土田勝弥、土田喬雄、鶴田眞次郎、戸塚保志^{とうぼた}、東畑精一、富永薫、那須皓、中島外吉、中野時之、中村為治、中山正則、中山太郎、中道等^{なかもち}、長尾太郎、野上豊一郎、野口謙次郎、野村茂、橋浦泰雄、橋本倚左衛門、橋本丈夫、林正道、林弥一郎、萩原正徳、平形知一、一柳喜一郎、広川弥五郎、樋畑雪湖^{ひばた}、深見志之助、藤田義雄、船山智^{ほら}、洞富雄、星野

辰雄、穂積重遠、穂積仲子、松井透、松崎善二、松平齊光、松本信廣、前田青邨、水野泰介、水野定子、南敏、三村清之介、宮尾しげを、宮本勢助、宮本璟、村上清文、森本六爾、安成四郎、安成三郎、矢田部動吉、吉岡義二、矢田部順子、柳田国男、山崎みつ子、山科岑夫、山内豊中、山内直子、山内春子、山内美艸子、山田穂随、山本靖民、吉岡清子、横山重、渡辺庸一郎、渡辺得男、渡部尚一、李周泳

¹参照した資料は、[岡1974]、『本山雑記』2007、『柳田國男伝』1988、[澁澤1961]、『澁澤敬三』（上・下）1979・1981、『柏葉拾遺』1956、『屋根裏の博物館—実業家澁澤敬三が育てた民の学問—』2002、佐野1998などである。

2009年度の活動

海外の調査では、インドネシアのバリでの祭祀芸能調査（2009年8月）、台湾高雄での道教儀礼の調査（2009年9月）、中国敦煌での文化財調査（2009年10月）、フィリピンのイフガオでの棚田調査（2010年2月）、インド・ケーララ州のクーリヤーッタムの芸能調査（2010年3月）を行った。国内では、福岡県篠栗町での民俗調査（2009年8月）と飯田市の遠山郷での霜月祭の調査（2009年12月）を実施した。講演は、国立能楽堂での企画公演「特集・梓弓」の解説（2009年4月）、三田社会学会シンポジウム「地域研究とオーラル・ヒストリー」でのコーディネーター（2009年7月）を務め、金沢での「女性をめぐる宗教世界」のシンポジウム（2009年7月）、国立台湾大學人類學系慶祝成立60週年国際会議（2009年11月）、「熊野三山歴史講座」（熊野本宮）（2010年1月）で講演した。著書としては、『東アジアの民衆文化と祝祭空間』（編著）慶應義塾大学出版会（2009年12月）。論文としては、「宗教演劇から世界遺産へ—南インド・ケーララのクーリヤーッタム—」『現代宗教』2009、秋田書店（2009年6月）。「生と死の相克—熊野からのメッセージ—」『国文学 解釈と鑑賞』74巻8号、ぎょうせい（2009年8月）。「苗族的な神話與現代—以中國貴州省黔东南為中心—」『人類學與人群的遷徙與重構—國立台湾大學人類學系慶祝成立60週年国際會議 論文集』國立台湾大學人類學系（2009年11月）。「神話の変貌と再構築—中国貴州省黔东南の苗族を中心に—」篠田知和基編『神話・象徴・言語』Ⅱ、楽瑯書院（2009年12月）。「祭祀と世界観の変容—中国貴州省苗族の龍船節をめぐる—」『法学研究』第83巻2号（2010年2月）。「湯立神楽のコスモロジー—遠山霜月祭を中心に—」篠田知和基編『水と火の神話—「水中の火」—』楽瑯書院（2010年3月）。辞典の項目執筆は、『日本思想史辞典』山川出版社（2009年4月）。辞典の監修については、『祭・芸能・行事大辞典』朝倉書店（2009年11月）。解説として、「『シラタカのお告げ』の現代的意義」『神と人のはざまに生きる—近代都市の女性巫者—』東京大学出版会（2009年5月）。書評としては、「高梨一美『沖縄の「かみんちゅ」たち—女性祭司の世界—』」『民俗芸能研究』第47号（2009年9月）。その他は、The History of Japanese Folklore Studies, *Japanese Book News*, JapanFoundation, No.61（2009年9月）。